

分娩介助実習における分娩第Ⅰ期の実習指導者の指導

津田佐貴子¹, 恵美須文枝²

Guidance about the first stage of labor provided by clinical practice instructors in birth assistance training

Sakiko Tsuda¹, Fumie Emisu²

The aim of understand to ascertain what kinds of teaching content and methods clinical practice instructors use to teach student midwives during the first stage of labor in birth assistance training, so was observed 20 midwives at 2 hospitals. These situations were classified based on similarities and differences by delivery phase and then categorized. Results, in the precursor and latent phase of labor, labor is not yet fast progressing and instructor was involved to, “have students comprehensively think about the state of the pregnant woman” “have students understand the progress of labor through palpation of contractions and internal examinations” “have students think about necessary actions according to the status of the pregnant woman and let them implement the actions accordingly.” In the acceleration phase of delivery, “have students make careful judgements focusing on changes in the progress of labor and act according to the predictions made.” In the phase with the maximum slope phase of labor, to pregnant women try to adapt to changes in their bodies occurring with the progress of labor, “have students observe pregnant women so that they can make judgements instantly” “support students so that they could take independent actions in accordance with the second stage of labor” was found to provided instructions unique to the phase of labor.

分娩介助実習における分娩第Ⅰ期の指導場面で、実習指導者は助産師学生にどのような指導を行っているかを理解するため、2箇所の病院で20名の助産師の指導を観察した。分娩時期別に指導場면을類似性・相違性に基づき分類、カテゴリー化した結果、前駆期及び潜伏期は分娩が切迫していないため、【産婦の状態を深く考えさせるように関わる】や【陣痛触診や内診をさせながら産婦に関わり、分娩進行を理解させる】、【産婦の状態に合わせた行動を考えさせ、学生主体で実践させる】という関わりがあった。加速期は、【分娩進行の変化に着目した慎重な判断と予測に合わせた行動を考えさせる関わり】、極期は、産婦の身体に生じる分娩進行の変化を理解させるために【産婦から目を離さずその場で判断できるようにする】や【分娩第Ⅱ期に向けて主体的に行動できるように学生の背中を押していく】関わりであり、産婦の分娩経過に沿って学生の行動を導いていることが解った。

キーワード：助産師教育、分娩介助実習、分娩第Ⅰ期、実習指導者、指導場面

I. 緒 言

分娩介助実習は、学生にとって実際の助産活動を自らの肌で感じ、考え、その実践から学びを深めてゆく重要な学修である。保健師助産師看護師学校養成所指定規則では、「実習中分べんの取り扱いについては、助産師又は医師の監督の下に学生一人につき十回程度行わせること。この場合において、原則として、取り扱う分べんは、正期産・経膈分べん・頭位単胎とし、分べん第一期から第三期終了より二時間までとする。」と定められている。多くの場合、助産師学生は臨床現場の一員となって、分娩介助を行うメインメンバーに位置づけられた実習をしている。この場面での実習指導者（以下、指導者）は、学生にとって重要な存在となり、分娩期の教育内容や養成機関が定める実習目標と共に、各学生の特徴や学修状況を把握し、受け持つ産婦の状況から学ばせるべきことを判断して、伝えたいことをその場で伝えなければならない。同時に指導者は、第一義的には母児の生命を優先させなければならない状況下にもある。従って、学生の能力を効果的に変化させるためには高度な指導スキルが求められる。

これまでの分娩介助実習指導に関する研究では、学生の学習段階に合わせた指導（堀内他、2007；岩木、1996；名取、岡部、有井、小林、滝沢、2004）や分娩介助の技術指導（古田、2004；北村、江口、2018）がある。その他、実習指導者が学生に期待する学びの構造（菱沼、2008）、分娩介助後の振り返りの意味（菱沼、2010）や北村、江口（2017）の助産師の教授活動尺度の開発による7因子の抽出、助産診断に関する教授活動（北村、江口、2019a）、倫理的配慮に関する教授活動（北村、江口、2019b）が行われている。更に、新人助産師を対象にした分娩の指導では、山本、片岡（2019）が好機を逃さず活用する、五感で感じ取る感覚を教える、自ら気づくよう促すという3つの臨床判断場面とそれぞれに解釈を促進する指導方法を報告し、指導場面とその方法が可視化されている。

以上のように分娩介助指導に関する検討がなされているほか、指導者についての調査では、研修の受講経験者は47.6%であり、また57.7%に指導モデルがおらず、自分自身の経験と先輩・同僚間のインフォーマルな情報交換など、手探りの指導に頼っているという現状が明らかにされている（緒方、恵美須、中田、下、2015a）。更に

指導力に関する調査では、緒方他（2015b）が短時間で急速に展開する出産場面を自在に教材化する能力強化の必要性を報告している。そして、津田、恵美須、下（2019）は、指導者の困難について分娩経過の理解や判断、臨床でしか学ばせられない助産技術に関する指導や産婦の安全・安楽と指導のジレンマ、指導力に関する課題などから指導技術の向上を提唱している。

このような経過から今回の研究では、分娩第Ⅰ期の指導場面に注目し、指導者が学生に対してどのような指導を行っているか、分娩第Ⅰ期の前駆期及び潜伏期、加速期、極期における指導について理解することを目的とした。

II. 研究方法

1. 用語の定義

指導場面とは、研究者が参加観察によって把握できる指導者の言語的、非言語的な学生への関わりとする。

分娩第Ⅰ期の区分は、前駆期及び潜伏期、加速期、極期の3区分とし、前駆期及び潜伏期は子宮口の開大が3cm未満の状態、フリードマン頸管開大曲線の潜伏期に相当する時期とする。また入院理由が破水や不規則陣痛である場合は、その後、潜伏期に移行する予測を基にそれを含める。加速期は、子宮口の開大が3～7cmの状態であり、頸管開大曲線の加速期及び最大傾斜期に相当する。極期は、児頭の急速下降期又は子宮口の開大8cmから全開大に至る減速期に相当する時期とする。

2. 研究デザイン

質的記述的研究

3. 研究期間

データ収集期間は、A病院は平成24年6月～8月初旬、B病院は8月末～10月初旬であった。

4. 観察対象

分娩介助実習の分娩第Ⅰ期に、指導者が助産師学生に関わっている指導場면을観察対象とし、その対象は指導者、助産師学生、産婦の三者とした。指導者は、助産師経験5年以上、かつ指導経験3年以上の助産師とし、産婦は助産師学生の実習を承諾し、実習開始時点で分娩第Ⅰ期が3時間以上あると予測される人とした。

5. データ収集方法

研究者は産婦のケアや実習指導に対して直接介入はしない「参加者としての観察者」の立場とした。特に指導者と学生の行動や思考に影響を与えるような動作や非言語的メッセージなどは一切行わず、観察による不都合が生じる可能性やマイナスの影響を与えると判断した時は、速やかに参加観察を中止した。

6. 分析データの生成と分析方法

データ収集は、学生が分娩第Ⅰ期にある産婦の実習を開始した時点から分娩第Ⅰ期終了までとし、指導場面をフィールドノートに記録した。また、確実性確保のために可能な限り、会話をICレコーダーに記録した。更に信頼性確保のため、研究者は観察者としての行動、観察記録や場面抽出のデータ作成方法について事前にトレーニングを受けた。妥当性確保のために、指導者と学生に研究者の立場について説明し、事後の必要時には、指導者に場面の意味などの確認を行い、不明確なデータについては除外した。

フィールドノートを基に、研究目的に関連する指導場面を1データとした。データ化した段階でその解釈が偏っていないか、現象の捉え方は客観的か、場面を構成する人々の相互行為の文脈を反映しているかなどを研究者間で検討し、妥当と考えられるものを分析データとした。それを分娩第Ⅰ期の時期別に区分して、比較しつつ、類似性・相違性に基づいて分別し、次に分娩経過の特徴を考慮した。観察時の各学生の学習段階が多様であったこと、学修進度と産婦の経過が合わないなど、必ずしもその時期の特徴といえない指導内容のデータが存在したため、そのような場合は、類似データの頻度が高い時期にそれを含めて分類した。分析の最終段階で同意の得られた指導者2名のメンバーチェックを受けた。

7. 倫理的配慮

研究の協力依頼は、病院の施設長と看護部長、そこで分娩助産実習を行っている助産師養成所の長に、研究の目的・方法を説明し、指導者と学生の選出をしていただくこと、また産婦を含めた三者への協力依頼を研究者が行うことについて、口頭と文書で説明をした。その後、各病院の師長と助産師教育担当教員に、研究者が指導者と助産師学生に対して、本研究の目的・方法を説明する時間を実習開始前に設けてもらうことを依頼した。また産婦に対しては、研究協力の同意が得られた指導者と学

生の受け持ちが決定した場合に、研究者が口頭と文書で説明し、同意を得た。

研究協力依頼書には、研究目的・方法に加えて、分娩第Ⅰ期の指導場面に、研究者が同席ことを記載した。観察場面では、研究者の存在が心理的負担や不快とならず、三者の関係性を壊さないように、研究者が努めることを約束した。また研究協力は自由意志であること、協力の可否が産婦の不利益や指導者の職務評価、学生の成績評価には一切影響しないこと、協力を同意した場合でもいつでも中断できることを説明した。更に、三者に緊急を要する事態が生じた場合は研究を中断し、助産師として緊急対応を優先すること、データの目的外使用はしないなどについても口頭と文書を用いて説明し、同意書に署名を得た。またデータは、匿名化し、資料は厳重に管理した。

本研究は、大学研究倫理審査委員会の承認（23愛県大管理第12-50号）を得て実施した。

Ⅲ. 結 果

1. 研究対象者の概要と指導場面データ

研究協力施設は、20年以上にわたって継続的に助産師教育に携わっている500床の地域周産期母子医療センターと552床の公立病院の2施設で、各施設10名の計20名の指導者について参加観察を行った。20名の平均臨床経験は15.5年、実習指導経験は3年～10年が8名、10年～15年は6名、15年以上20年未満が6名であった。協力学生は4年制大学の学部助産師学生2名、1年課程養成機関の学生7名の計9名で、その平均年齢は26歳で9名中のうち6名に看護師としての臨床経験があり、そのうち産科経験者は3名であった。また学生の分娩助産は1例目～7例目の段階であった。協力産婦は24名で初産婦14名、経産婦10名であり、観察時期は前駆期及び潜伏期が10例、加速期は8例、極期は12例であった。以上から分析データは、前駆期及び潜伏期99場面、加速期22場面、極期68場面で合計189場面となった。

2. 分娩時期別における判断能力を形成する指導

以下の記述にあたっては、【 】はカテゴリー、《 》はサブカテゴリー、〈 〉はコードを示す。また事例場面については斜体で示し、研究者が（ ）内に補足語を記載した。

1) 前駆期及び潜伏期の産婦を受け持つ場合の実習指導 (表1)

前駆期及び潜伏期のデータから37コードを取り出し、10のサブカテゴリから【産婦の状態を深く考えさせるように関わる】、【陣痛触診や内診をさせながら産婦に関わり、分娩進行を理解させる】、【産婦の状態に合わせた行動を考えさせ、学生主体で実践させる】の3つのカテゴリが抽出された。

(1) 【産婦の状態を深く考えさせるように関わる】

このカテゴリを構成する《問いやヒントを与えて考える筋道を作る》は、重要な情報や判断のポイントを示す関わりや(産婦の状態把握を学生と一緒にを行いながら、指導者の思考をたどらせ考えさせる)関わり、(報告内容をテコに、不足部分の補足や内容を順序だてて述べられるよう方向づける)などの場面がみられ、以下のようであった。

表1 前駆期及び潜伏期の産婦を受け持つ場合の実習指導

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
産婦の状態を深く考えさせるように関わる	問いやヒントを与えて考える筋道を作る	<ul style="list-style-type: none"> 有効陣痛かどうかなどの判断の核となる重要な情報を提示して、学生に考えさせる 分娩進行判断のポイントとなる点を強調し、産婦を観ていく方向の考え方を教える 産婦の状態把握を学生と一緒にを行いながら、指導者の思考をたどらせ考えさせる 報告内容をテコに、不足部分の補足や内容を順序だてて述べられるよう方向づける 経産婦の前回の分娩経過や今回入院後の経過などの情報把握を学生に見せながら、思考の筋道を示す 学生の報告に問いを追加して、学生が考えていることをわかりやすく整理し、わかっていなかったことに気付かせる 便意など産婦の訴えについて、分娩進行との関係を考えさせる
	考えの整理を助ける	<ul style="list-style-type: none"> 学生の考えを聞きながら、指導者の考えと突き合わせて、相談しながら考えを導く 学生が述べた産婦の情報内容から、現在の分娩時期の診断を導く 教室で学んだことと現在の産婦の状態を照合して判断させる 学生から産婦の情報を引き出し、今回の分娩にとって、それが重要な情報であることを意識させる
	正常と正常逸脱の判断を考えさせる	<ul style="list-style-type: none"> 産婦に対して、今後起こりうる異常や緊急の対応行動について考えさせる 回旋異常などの時、その場の対応を行った後で学生に説明して理解させる 陣痛促進剤を使っている産婦について、現在の状態と異常(過強陣痛など)との鑑別を考えさせる 学生が気づいていない、異常に関連する重要な情報を示して判断を方向づける
	学生の考えを待つ	<ul style="list-style-type: none"> 学生の考えがまとまるようにヒントを出して考える時間を与える 学生が考えたことの結果が出るまで待ち、産婦の状態を確認してから次の思考に導く
陣痛触診や内診をさせながら産婦に関わり、分娩進行を理解させる	陣痛の触診感覚を教え、陣痛の程度を理解させる	<ul style="list-style-type: none"> 一緒に触診を行いながら陣痛の強さを判断できるように関わる 陣痛を触知しながら分娩の進行について、学生にサインを送って気付かせる 陣痛を触知させながら、CTGモニター上の陣痛の状態や産婦の訴えに注目させて、陣痛の強さを理解させる
	言葉や所見の手本を示し、イメージさせながら内診をさせる	<ul style="list-style-type: none"> 内診の仕方をやってみせて、学生が次に行えるように導く 学生の内診時に、子宮口の位置や児の下降度を言葉にして伝える 学生の内診時に、子宮口の開大度や位置を手まねで学生に示して触知の方法を伝える
	産婦に関わりながら、分娩進行判断の考え方を伝える	<ul style="list-style-type: none"> 産婦の傍にいながら、常に分娩進行状態を考えていることが大事であることを伝える 学生と一緒に呼吸法を誘導しながら陣痛を触知し、分娩進行の状況を学生に確認させる 産婦の身体に現在起こっていることを産婦や家族に説明しながら、学生にも分娩進行と対応の方法を理解させる 児の下降感や肛門圧迫感を産婦に聞きながら、急な進行に気付く方法や産婦への対応を指導者自身で試みせる
産婦の状態に合わせた行動を考えさせ、学生主体で実践させる	産婦の状態に合わせた行動計画を考えさせる	<ul style="list-style-type: none"> 産婦の状態に合った情報把握と個別性や優先度を考慮する考え方を示す 今後の分娩進行とそれに合わせた行動を考えさせ、準備させる 現在の産婦の状態について学生の考えを補足し、学生の行動計画を補う 学生が混乱した時には、今後行っていく行動を羅列して考えさせる
	陣痛促進剤を使用している産婦に対する行動計画を考えさせる	<ul style="list-style-type: none"> 陣痛促進剤を使用する産婦の状態に照らして、点滴実施の可否の判断を考えさせる 陣痛促進剤などを使用している産婦の薬剤の知識や注意を確認し、時間毎の経過の判断を行うための行動計画を指導する 勤務交代する時期などに産婦に対する今後の方針について考えさせる
	学生主体で実践させるように関わる	<ul style="list-style-type: none"> 産婦からの質問に対して、学生自身で答えられるような状況を作り、不足を補う 判断に悩む状況では、指導者が産婦の安全確保できる範囲で学生の判断に同調・容認をして、学生主体で進めさせる 学生が行動できるようになったことの確認と承認で、自信をつけさせる

産婦の状態を報告する場面で、「体温36.7度、食欲あり、(子宮の)張りは(産婦は)気づかず、腰痛軽度……」と、学生は知っている限りの情報をとめどなく一生懸命に述べ続けた。そのうちに指導者は一瞬のタイミングで「(陣痛は)間隔的に何分おきとかではない?」と問いかけ、「無いです。」「羊水は出てこないです。」と述べる学生のテンポに合わせて、(ナプキン付着物の)「色は?」と問い、陣痛の話から話題が羊水に移った学生の思考に沿って、追加情報や情報の関連性に気づけるように質問を挟むというような関わり方を繰り返し行っていた。

《考えの整理を助ける》場面は、〈学生の考えを聞きながら、指導者の考えと突き合わせて、相談しながら考えを導く〉や〈教室で学んだことと現在の産婦の状態を照合して判断させる〉などが、学生が考えに自信が持てていない場合や判断に悩んでいる場面で多くみられた。

《正常と正常逸脱の判断を考えさせる》は、今後起こりうる異常や緊急時の対応行動を考えさせる場面などでみられ、以下の指導であった。

指導者は「急速に進んできた時、どういうことがある(産婦に起こるか)?」と聞いた。すると「急速に進んだ場合……」と学生が考えている間、答えを待って、学生が「子宮の収縮力も強いので、児の負担も大きいし、破水したりすると羊水量も減って、変動一過性徐脈が出たり、早発一過性徐脈も強く出るかもしれない。」と答えた。すると指導者は「そうだね、急速に進むと児にも影響があるよね、強く張ってきた時は、どうやって(児の状態を)確かめるの?」と、学生の答えに沿って次の問いを発してゆくという方法を行っていた。

《学生の考えを待つ》では、〈学生の考えがまとまるようにヒントを出して考える時間を与える〉や〈学生が考えたことの結果が出るまで待ち、産婦の状態を確認してから次の思考に導く〉という学生に時間をとって考えさせる方法が、産婦の経過が緩慢な状況下で行われていた。

(2) 【陣痛触診や内診をさせながら産婦に関わり、分娩進行を理解させる】

《陣痛の触診感覚を教え、陣痛の程度を理解させる》は、一緒に触診を行ったり、陣痛触知とそれ以外の方法を併せて、陣痛の強弱の判断ができるように関わっていた。

指導者が産婦に「自分の中で大きい波と小さい波がありますか」と聞きながら、学生と陣痛触知をする一方で同時にCTGモニターをさりげなく学生に示した。学生は指導者の視線を追って、産婦の反応を確認しつつ陣痛

発作の強弱を把握しようと行動していた。

《言葉や所見の手本を示し、イメージさせながら内診をさせる》場面は、学生が内診指を第二関節以上挿入するのを見て「入れるとすぐのところに頭があると思う。子宮口がびろって、しているのわかる?」と何がどのぐらいの位置にどんな感じで触れるのかを伝え、学生は指で感じている触覚を納得した表情を見せて、次の所見を観る動作に移行した。指導者は、学生に見えるように子宮口の開大度を自分の左手で円を描き、それが膈内のどの方向にあるのか円をなぞって示し、子宮口開大を確認させた。

指導者はまず〈内診の仕方をやってみせて、学生が次に行えるように導く〉や、内診所見が指先の感覚でわかるように子宮口の位置や児の下降度を言葉や手まねで学生に示して伝えることを行っていた。

《産婦に関わりながら、分娩進行判断の考え方を伝える》を構成する〈産婦の傍にいながら、常に分娩進行状態を考えていることが大事であることを伝える〉場面は、学生が報告に来て、産婦の状態の事実のみを述べた時、指導者は「ずっとそこに(産婦の傍で)心音とりながらいたわけじゃん、その場、その場で児の状態をチェックしてなきゃいかんのだよ。今ここでやってたら(報告しながら、考えているということでは)いかんよね。その時にその場で考えていないとね。傍にいるなら、そこでいろいろ考えてね。」と伝えて、学生の改善行動を促した。更に、呼吸法を誘導しながら陣痛触知を行ったり、産婦の身体変化や分娩経過を産婦や家族に説明する場面でも、学生に指導者が実例を示す方法で理解させようとしていた。

(3) 【産婦の状態に合わせた行動を考えさせ、学生主体で実践させる】

《産婦の状態に合わせた行動計画を考えさせる》は、産婦の個性やケアの優先度を考えさせて、行動を具体化することや混乱が生じないように計画を方向づけるなどの指導であった。

指導者が学生に「いつ内診しましょうかね?」と問いかけ、学生は「今、(産婦さんは)陣痛間歇時に落ち着いていて、陣痛発作時痛そうで、筋緊張強い。状況変わったら子宮口開大度、下降度を観たいと思います。」と一つ一つ考えながら言った。そこで指導者は「まだ時間的には決められない感じ?」と問い、学生は「現状からすると、子宮口全開大17時頃と考えていて、潜伏期と(自分は)思っていて、加速期になって徐々に(陣痛が)強

くなってきた時に（内診を）したいと思います。」と述べた。すると指導者は大きく頷いて、学生の考えに同意を示した。

《陣痛促進剤を使用している産婦に対する行動計画を考えさせる》は、学生に点滴実施の可否を考えさせ、薬剤の知識を確認して、産婦の必要なケアに結び付けるための指導などの場面であった。

《学生主体で実践させるように関わる》は、学生と産婦の関係を繋ぐ関わりであり、学生が産婦にCTGモニターを装着している時、産婦が「順調に行ったら、（生まれるのは）いつ？」と指導者の方を見て聞いた。すると指導者は「陣痛始まっていたら平均は？」と、学生の方を見て言うと言った学生は、自分に答えるように言っていることに気づいて、「（初産婦さんは）14時間ぐらいで子宮口は10cm開大。」と指導者と産婦の両方を見て答えた。すると指導者は続けて「平均だと10時から陣痛が来たとする、夜の10時すぎぐらいかな。」と言い、「点滴したからといって急に開くものでもないです。ゆっくりいきましようね。」と産婦と学生に向かって話しながら、学生を会話の中に引き込むように関わっていた。また学生が悩む状況では、相談する姿勢で学生の考えを聞き、学生と判断が一致しない場合でも、産婦の安全確保を考慮しつつ、学生主体で進めさせるように関わっていた。更に〈学生が行動できるようになったことの確認と承認で、自信をつけさせる〉ことで、学生の自立を促すような努力もしていた。

2) 加速期の産婦を受け持つ場合の実習指導（表2）

加速期の指導では、22場面から11コードを抽出し、3つのサブカテゴリからなる【分娩進行の変化に着目した慎重な判断と予測に合わせた行動を考えさせる関わり】

のカテゴリが抽出された。

児の下降に伴う様々な《産婦の兆候を見逃さないように、タイミングを捉えて変化をわからせる》では、血性分泌物や児頭下降感、陣痛の程度や児心音聴取部位の変化など、それらの出現時期をタイミングよく察知して、観察方法を教えるような場面がみられた。産婦がナプキンを手にとってトイレに入ろうとしている時、学生はベットの布団をたたんでいた。それを見て指導者は、産婦の方を指さして学生に「おしるしとか出るよね。」と声をかけた。しかし学生はその意味が理解できないながらも、とりあえず産婦に近寄ったが産婦はトイレに入ってしまった。学生は言われた意味を知りたくて指導者に近づくと、「（とりかえた）ナプキンとか見せてもらったり。」と伝えられて、学生はやっと大きく頷いて観察すべき兆候を理解できたようであった。

また、《分娩進行の変化に伴った慎重な判断を理解させる》場面は、児心音が不安定な産婦の足浴が終わった後、指導者は学生に「（CTGを装着して実施したけど）足浴を行う前に、児心音のことを考えた？児心音はどうかなって。」と確認した。学生が何も言わないので続けて「足浴中には、児心音はどうかなって考えた？」とたたみこんで聞き、学生は「ベースラインの数字だけを見てました。」と答えた。指導者は更に「モニター画面を見てたかな？」と聞き、学生は「見てないです。」と目線を落として答えた。この場面では指導者は、実施中の学生の様子を遠目で見守りながら、観察不足からくる危険性を学生に伝えていた。その他、産婦の歩行の可否や経験的に分娩経過が進むと思うような慎重な判断を必要とする場面、その時を逃さず、学生に気づかせる関わりがみられた。

《これまでの産婦の状態と内診所見を照合し、今後の

表2 加速期の産婦を受け持つ場合の実習指導

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
分娩進行の変化に着目した慎重な判断と予測に合わせた行動を考えさせる関わり	産婦の兆候を見逃さないように、タイミングを捉えて変化をわからせる	<ul style="list-style-type: none"> 産婦の痛みの強さが変化したことを示して進行に気付かせる 児心音聴取部位の移動と一緒に確認して、進行したことを理解させる 進行に伴って出現する児心音や血性分泌物などの変化をタイミングよく観察させる 指導者が陣痛やおしりに来る感じを産婦に確認して、下降度の判断を示す 学生に先進部の下降感を触らせ、児の下降度を理解させる
	分娩進行の変化に伴った慎重な判断を理解させる	<ul style="list-style-type: none"> 誤った行動や判断を、時間をかけずに指摘して修正させる 進行しそうな産婦の歩行の可否は、慎重な判断が必要なことを考えさせる 指導者が経験的に「進む」と思う具体的な兆候を伝えて、判断に加味させる
	これまでの産婦の状態と内診所見を照合し、今後の予測から行動予定をイメージさせる	<ul style="list-style-type: none"> 産婦の状態と内診所見を照らし合わせて、進行を確認させる 指導者の勤務交代時には、進行を確認するための内診の機会を作る 現段階での分娩時刻の予測を学生に確認し、行動予定をイメージ化させる

予測から行動予定をイメージさせる》は、〈産婦の状態と内診所見を照らし合わせて、進行を確認させる〉や〈現段階での分娩時刻の予測を学生に確認し、行動予定をイメージ化させる〉などの場面が観察された。

3) 極期の産婦を受け持つ場合の実習指導 (表3)

加速期に引き続く極期の指導では、18コードを抽出し、6つのサブカテゴリーから【産婦から目を離さずその場で判断できるようにする】、【分娩第Ⅱ期に向けて主体的に行動できるように学生の背中を押していく】という2つのカテゴリーが生成された。

(1) 【産婦から目を離さずその場で判断できるようにする】

極期の産婦は産痛緩和のニーズが強く、またその痛みの強さ故にその後の進行に強い不安を抱く時期であり、産婦から目が離せなくなる。しかし、学生は娩出介助の準備に頭がいっぱいになり、産婦から関心が離れる状況になってしまいがちである。従って、産婦への注意力を引き戻すように《産婦から目を離さず分娩進行に目を向けさせる》場面では、学生が陣痛室の産婦から離れ、分娩室で物品や環境の準備をし終わったのち、指導者に産婦の進行について「進行が速い」と報告した。産婦のところに行き来していた指導者は、「かれこれ(産婦から離れてから)30分も経つけれど、今まで分娩室の準備

していたんだよね。」と伝え、学生がその間にも自分で、産婦の変化に対応することが大事であることを気づくように促していた。

また、産婦の傍にいて学生に状況を理解させるため、〈分娩が迫っていることを産婦に説明し、励まししながら学生にも切迫感を伝える〉や〈産婦が訴える努責感が児の下降か否かの判断を学生に考えさせる〉など、《産婦には分娩進行を説明し、学生には進行の理解と切迫感を伝える》という指導者自らが行動しながらの指導場面がみられた。

肛門や陰裂の哆開、児頭下降の触知、産婦のいきみみたい感覚の程度など、児頭下降に伴う兆候を、《その場で分娩進行を示して、判断できるようにする》関わりでは、産婦が側臥位で陣痛発作時に「痛いー」と声をあげて「フー」と呼吸法をし始めると、それに合わせて指導者が腰部のマッサージをしている学生の手の上に自分の手をあてがい、児頭下降による肛門抵抗を観るよう誘導した。陣痛発作が終わると学生は自分の手を見せて「この辺りですか?」と無言の動作で児頭下降触知の位置を確認し、指導者は次の陣痛発作が来るタイミングに合わせて、産婦の外陰部から肛門部にかけて手のひら全体を使って支えるように、学生の手自分の手を重ねて伝えていた。

表3 極期の産婦を受け持つ場合の実習指導

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
産婦から目を離さずその場で判断できるようにする	産婦から目を離さず分娩進行に目を向けさせる	<ul style="list-style-type: none"> 分娩準備で関心が離れている学生に、産婦への注目を喚起する 産婦の傍を離れるべきでないことを言葉や態度で伝える 産婦の傍から離れる時間の長さを判断できるように仕向ける
	産婦には分娩進行を説明し、学生には進行の理解と切迫感を伝える	<ul style="list-style-type: none"> 分娩が迫っていることを産婦に説明し、励まししながら学生にも切迫感を伝える 産婦が訴える努責感が児の下降か否かの判断を学生に考えさせる
	その場で分娩進行を示して、判断できるようにする	<ul style="list-style-type: none"> 肛門や陰裂の哆開を確認させて、進行度を判断させる 児頭下降の触知と一緒に確認して、進行度の判断をさせる 産婦のいきみみたい感覚の程度を確認することに気づかせ、進行度の判断をさせる 内診所見と肛門哆開を合わせることで、進行を理解させる 内診所見と陣痛の変化で、進行度を判断させる 産婦の状況に対する学生の判断をその場で指導者が補足し、強化する
分娩第Ⅱ期に向けて主体的に行動できるように学生の背中を押していく	分娩時刻を予測し、経過に合わせた分娩準備の具体的な行動を考えさせる	<ul style="list-style-type: none"> 陣痛の強さを基に分娩時刻の予測の考え方を教える 分娩時刻の予測のために、前回の分娩状況や現在の陣痛の強さを言葉にして思考の筋道を見せる 分娩進行の変化に合わせて、自分の分娩準備行動の順番や動作を考えさせておく
	行動を起こすタイミングを投げかけて方向づける	<ul style="list-style-type: none"> 予め考えておいた行動をタイミングよく伝えて、行動させる 産婦の進行に合わせて、内診の時期や分娩室移室、分娩が進むケアをその場で方向づける
	指示をして分娩進行に追いつかせ、主体的に行動できるように学生の背中を押す	<ul style="list-style-type: none"> 進行に合わせて学生の行動を指示・補足して、分娩介助できる準備が間に合うようにする 分娩台の産婦とのやりとりを途切れさせないように学生にサインを送るなど、学生主体で行動できるよう仲介をする

(2) 【分娩第Ⅱ期に向けて主体的に行動できるように
学生の背中を押していく】

《分娩時刻を予測し、経過に合わせた分娩準備の具体的な行動を考えさせる》は、陣痛の強さや前回の分娩状況を基に分娩時刻の予測をさせ、学生が慌てないように行動の順番や動作を考えさせていた。学生が準備したワゴン上に産婦の外陰部消毒に使用する綿花にインジククリームがのせてある2つを見て、指導者は「外陰部消毒したい時、2回できないかもしれないからね。状況に応じてやるのよ。」と、経産婦で進行が早いことを予測させ、いつも練習しているようにはできないことを伝える場面などがあつた。

実際には学生に前もって具体的な行動を考えさせても、その実施時期が学生にわからない場合には、《行動を起こすタイミングを投げかけて方向づける》を次のように行っていた。学生は予め、子宮口6cmぐらいになったら分娩準備をしていきたいという行動計画を指導者に報告していた。その時の産婦は陣痛発作50秒、間歇2～3分、努責が出現し始めていた。産婦の状態を報告に来た学生に指導者は「子宮口6cmの産婦はどんな感じ?」と聞いた。しかし、学生は「発汗していて。」と要領を得ない回答のため、指導者は「陣痛は?」とたたみかけて聞き、学生が「2～3分間歇、発作50秒、排便感がある」と答え、指導者が頷きながら聞いているうちに、学生が「陣痛2～3分」と答えを繰り返し、「アッ」と、娩出準備の時期だということに気づくことができた。このような場面は内診実施や分娩室移室などのタイミングの判断場面でみられた。

また、《指示をして分娩進行に追いつかせ、主体的に行動できるように背中を押す》は、学生と産婦とのやりとりを途切れさせない関わりであった。

分娩室に入った産婦の進行状況を確認した後に、学生が手洗いをしている一方で指導者は、産婦の腰部マッサージを行っていた。産婦は陣痛2分間歇、発作40秒、発作時に苦痛様表情で痛みを堪えながら「横向いてもいいですか?」と聞いた。指導者が学生の方を見てどうするか、のサインを出すと、手洗いをしていた学生は、指導者と産婦に向かって大きな声で「(横向きになって)いいですよ」と返答した。その言葉を受けて、指導者は「いいって。」と産婦が右側臥位になることを助けた。

IV. 考 察

1. 分娩経過に合わせるように導く

本研究の結果では、分娩第Ⅰ期各期における産婦の経過に沿った、助産実践者としての指導場面が示されていた。前駆期及び潜伏期の産婦は、身体的には陣痛間歇・発作時に関わらずほぼ普通に会話ができ、体の力を抜くことや呼吸のコントロールをする余裕がある。そのため指導者は産婦にゆっくり関わり、学生には時間をかけて丁寧に診断技術を教えることができる。この時間的な余裕が《問いやヒントを与えて考える筋道を作る》や《考えの整理を助ける》、《正常と正常逸脱の判断を考えさせる》などに示され、学生の思考のペースに合わせて、多角的に深く思考過程をたどらせる指導となっていた。

また、次の加速期では、産婦には顕著な分娩進行による兆候がみられ始めるため、それらを見逃さないようにタイミングよく学生を誘導し、慎重な判断ができるように関わっていた。このような指導は、産婦の個別に生じる進行の変化を気づかせ、タイミングよく産婦の兆候を指導者自身が把握でき、かつ五感を通して伝える場面の共有がなければ成り立たない。実践者としての力量が最も求められ、助産実践そのものを学生が学び取れる、現場ならではの指導といえる。それは、前駆期及び潜伏期の指導が前提となって、加速期に積み重ね、極期への実践行動に繋げられるように経過を予測し、次の行動イメージを形成してゆくように導く指導となっていた。

更に極期は、産婦自身では自分をコントロールし難い苦痛が出現することから、ひとりにされることへの不安や恐怖が強く、コミュニケーションをとることも困難になる。そのため指導者は、学生と共に常に産婦に寄り添うことに重きを置いた指導を行っていた。そしてこの時期は、分娩進行状態を考えさせるよりも、ありのままの産婦の様子を学生に見せ、学生自身の五感で切迫している状態を感じ取らせながら、分娩進行状態を把握できるような関わりが行われていた。渡邊、恵美須(2010)の熟練助産師の研究では、極期になると助産師は、言語を介した産婦とのコミュニケーションが減少し、言語を介さない「観る」、「触れる」、「聴く」など助産師自身の感覚を用いた観察で、分娩進行を判断していることが述べられており、今回の結果でも、このような助産師自身の感覚で判断しながらのケアが重要であることを学生に伝える場面がみられた。また、同時に学生が予め考えてい

た児娩出に向けての準備行動を促し、思考を行動化させてゆく関わりが指導の中心になっていた。

2. 臨床でしかできない指導

産婦の分娩経過に沿った指導場面をみてゆくと、前駆期及び潜伏期の【陣痛触診や内診をさせながら産婦に関わり、分娩進行を理解させる】や加速期の《産婦の兆候を見逃さないように、タイミングを捉えて変化をわからせる》、更に、極期の【産婦から目を離さずその場で判断できるようにする】場面で指導者は、学生と共にケアを行いながら分娩進行の状況を理解させるように関わっていた。谷津（2003）によれば、学生は産婦への関わりに戸惑いや困難を感じた時、その解決への手がかりを熟練助産師の振る舞い方から学んでいる。今回も指導者の行動を通して、分娩進行の理解と共に、産婦と助産師の関係やケア実践を学ぶ機会になっていた。学生は指導者の行動をモデルとして、思考を深め、行動の模倣から実践能力を身に付けてゆく。そして学生は、指導者の言動をきっかけに考えをめぐらし、分娩進行の判断を学ぶ過程を、内村（2007）も視線結合的姿勢による指導として述べている。今回の結果では〈陣痛を触知させながら、CTGモニター上の陣痛の状態や産婦の訴えに注目させて、陣痛の強さを理解させる〉や内診所見の指導や分娩時刻の予測、トイレに行った産婦の観察、分娩台の産婦の体位変換などあらゆる場面でこのことが確認できた。これらの指導は、教室や学内演習では実際にはできない臨地実習ならではの指導方法である。分娩介助の実践技術とは何か、その特性や判断の道筋を、産婦の動的变化に応じて見本を示しながら直接的に伝授してゆく現場学修の真髄といえることができる。

また、分娩介助技術特有の診察技法として、陣痛触知や内診技法、肛門抵抗感、及び、会陰部膨隆の意味やその判断は、分娩進行判断の必須技術となる。それらの指導には《陣痛の触診感覚を教え、陣痛の程度を理解させる》や《言葉や所見の手本を示し、イメージさせながら内診をさせる》などで、手の感覚を通して教えること、内診では目に見えていない指の感覚や方向を言葉で伝え、目に見えるように子宮口開大や形状を表現していた。そしていずれの場面でも必ず、共に産婦に関わり、手取り足取りの指導で、学生に「感じる」ことの重要性を伝えていた。山本、片岡（2019）も新人助産師の気づきを促す触診場面において、五感で感じ取る感覚を教えることの重要性を述べている。助産技術として重要な触診や

内診は、産婦にとって身体的な侵襲と羞恥心を伴う。そのため安全・快適と人権を尊重した技術指導のために、「感じさせて伝える指導法」として、よりリアリティのある教材の開発など、今後の工夫が必要である。

また、分娩第Ⅰ期の前駆期及び潜伏期の〈陣痛を触知させながら、CTGモニター上の陣痛の状態や産婦の訴えに注目させて、陣痛の強さを理解させる〉や、加速期の《産婦の兆候を見逃さないように、タイミングを捉えて変化をわからせる》、極期の《その場で分娩進行を示して、判断できるようにする》など、指導タイミングの重要性が示された。この結果は、山本、片岡（2019）も指摘している好機を逃さない指導場面の教材化とその活用が実習指導上のコツといえる。それは学生が見逃しがちな変化に注目させることやその場で同じ現象を共有しながら、実践の極意を伝える教育プロセスを成り立たせるポイントともいえる。産婦の状態を把握する指導タイミングは、その時にしか得られない観察力が前提であり、産婦の何を感じ、何を観ているのかを把握することにはありえない。指導者の実践能力について、大崎、志村、恵美須（2014）は、助産教員が指導者に求める能力の中で最も重要度が高く、全ての指導者が最低限備えるべきと述べている。指導者は、産婦の何を観て重要な兆候を捉え、それをどのように判断するか、そのような場面をより多く学生と共有する意識と関心が重要である。

今回の結果では、分娩第Ⅰ期の産婦の経過時期に応じた指導の具体的な特徴のいくつかを取り出すことができた。しかし、今回は、臨床経験のある学生が半数以上であったことの検討不足や観察場面が事例によって異なること、また分娩各期の所要時間や学生の学修進度を考慮した分析ができていないなどの結果が残った。それらを含めた検討が必要である。

V. 結 論

分娩第Ⅰ期における経過時期に応じた指導者の指導を参加観察により抽出検討した。前駆期及び潜伏期は、【産婦の状態を深く考えさせるように関わり】、【陣痛触診や内診をさせながら産婦に関わり、分娩進行を理解させる】、【産婦の状態に合わせた行動を考えさせ、学生主体で実践させる】を取り出せた。また加速期は【分娩進行の変化に着目した慎重な判断と予測に合わせた行動を考えさせる関わり】、続く極期は、【産婦から目を離さずその場で判断できるようにする】、【分娩第Ⅱ期に向けて主

体的に行動できるように学生の背中を押していく】を抽出した。指導者は、学生と共に産婦の分娩進行を判断しながら産婦に寄り添う助産実践を示し、その現場で生じる状況に合わせて、臨床現場でしか伝えられない実践内容と指導方法を工夫しながら学生に関わっていることが解った。

謝 辞

本研究へのご理解と快く研究フィールドを提供してくださいました病院・学校施設代表者様と指導場面に研究者が参加観察するという特殊な状況を了解し、ご協力いただいた指導者及び助産師学生の皆様、また出産という貴重な機会に立ち会うことをご了承くださった産婦様やご家族様に心より感謝を申し上げます。本研究は第23回日本看護学教育学会学術集会の発表に加筆修正を加えたものである。

文 献

古田祐子. (2004). 分娩介助技術指導において助産師学生に「わかった」と認識させる指導者の言語的教育技法. *母性衛生*, 45(2), 342-352.

菱沼由梨. (2008). 臨床指導者が分娩介助初期の学生に期待する学びの構造. *日本助産学会誌*, 22(2), 146-157.

菱沼由梨. (2010). 臨床指導者の視座による分娩介助の「振り返り」という学びの意味. *母性衛生*, 50(4), 637-645.

堀内寛子, 服部律子, 谷口通英, 布原佳奈, 名和文香, 宮本麻記子. (2007). 本学学生の分娩介助技術習得のプロセスとそれに応じた臨床指導のありよう. *岐阜県立看護大学紀要*, 7(2), 9-17.

岩木宏子. (1996). 助産婦学生の分娩介助実習における学びの積み重ねについて—学生の視座に基づく学びの積み重ねのプロセス—. *日本助産学会誌*, 10(1), 36-45.

北村万由美, 江口瞳. (2017). 分娩介助実習における助産師の教授活動尺度の開発と信頼性・妥当性の検討.

日本看護科学会誌, 37, 426-436.

北村万由美, 江口瞳. (2018). 分娩介助実習における助産師の教授活動 (第1報) —分娩介助技術—. *母性衛生*, 58(4), 524-531.

北村万由美, 江口瞳. (2019a). 分娩介助実習における助産診断に関する助産師の教授活動. *母性衛生*, 60(1), 39-46.

北村万由美, 江口瞳. (2019b). 分娩介助実習における倫理的配慮に関する助産師の教授活動. *母性衛生*, 59(4), 810-817.

名取初美, 岡部恵子, 有井良江, 小林康江, 滝沢美津子. (2004). 分娩介助実習における学生の技術習得状況と課題. *山梨県立看護大学紀要*, 6, 85-94.

緒方京, 恵美須文枝, 中田恵美, 下陸子. (2015a). 分娩介助実習を担当する臨床指導者の実態 (第1報) —実習指導助産師の背景—. *母性衛生*, 55(4), 721-729.

緒方京, 恵美須文枝, 中田恵美, 下陸子. (2015b). 分娩介助実習を担当する臨床指導者の実態 (第2報) —実習指導助産師の指導能力—. *母性衛生*, 55(4), 730-741.

大崎博子, 志村千鶴子, 恵美須文枝. (2014). 助産教員が分娩介助指導者に求める能力. *日本助産学会誌*, 28(2), 196-206.

津田佐貴子, 恵美須文枝, 下陸子. (2019). 分娩介助実習における臨床指導者の困難と提案・要望. *母性衛生*, 60(1), 47-57.

内村美子. (2007). プリセプターとの共同実践による新人看護師の熟達の関係論的アプローチ. *日本看護学教育学会誌*, 16(3), 49-56.

渡邊淳子, 恵美須文枝. (2010). 熟練助産師の分娩期における判断の手がかり. *日本助産学会誌*, 24(1), 53-64.

山本真実, 片岡弥恵子. (2019). 実地指導者が新人助産師の分娩期における気づきと解釈を促進する教育. *日本助産学会誌*, 33(1), 38-49.

谷津裕子. (2003). 分娩介助場面における助産師学生の熟練助産師からの学び. *日本助産学会誌*, 16(2), 46-55.